
僕の初恋

秋彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の初恋

【Nコード】

N0541T

【作者名】

秋彦

【あらすじ】

母の再婚相手の連れ子である義兄とのラブストーリー 20歳にしてやっと恋する気持ちを持った幸也、しかしその相手は義理のお兄ちゃん…可愛い系の男の子×弟命の溺愛お兄ちゃん

自己紹介（前書き）

はじめまして秋彦です。 初投稿なので話めちゃくちゃかもしれませんが温かい目でみてください。

自己紹介

僕の名前は、桜井 幸也^{ゆきや}。今年で20歳になる。僕の家族は僕と母の二人だけ、父は僕が16歳の時にがんで死んだ。

それから僕は母の迷惑にならないようにずっといい子を演じてきた。だから今回母に再婚したいと言われ本当にうれしかった、やっと自由になれる！

母は、僕の育児のために仕事をやめたが所謂キャリアウーマンというやつだった。だから、父が死んだあとも生活が苦しくはならなかった。でも、僕の性格は変わった。人当たりが良く、頭も良く、手間のかからないいい子、それが他人から見た僕の印象になった。

高校でバンドを組んでいて、そのメンバーという時にはワガママを言ったりした。だから今、僕は壊れず生きていられた。

そして母が再婚すれば、僕は一人暮らしをはじめもう気を使っていい子を演じなくてすむ。それが嬉しくてなんとか破談にならないよう明日の、再婚相手との対面について計画を練っていた。

自己紹介（後書き）

まだタイトル通りの話になってませんがこれからラブストーリーになるはずです。

出会い（前書き）

兄の名前に秋彦を使ってしまった…夢小説ではないはず。

出会い

夜、19時にレストランで待ち合わせ。時間より10分前に着いたけど向こうはかなり待っていたようだ。まずは自己紹介。「私は宮野 達馬だ。よろしくね こっちが息子の「秋彦だよ。」達馬の言葉を遮り自己紹介してきた秋彦は顔はあまり似ていないがニコツと笑う優しそうな雰囲気は達馬と良く似ている。「私は桜井 麻衣です。」僕は幸也です。「簡単な自己紹介もすみ会話が弾んだこともあって再婚は確実になりそうだ。「ちよつとトイレ行ってくる。」そういつて僕が席を立とうとすると秋彦も席を立った。

「ねえ、幸也君は何考えてるのかな？俺も世渡りを良くしようって考えてるからわかるんだよね。楽しそうに笑ってるけど…違うこと考えてるよね。」初めてだった。今までそんなこと言う人はいなかった。その時この人には敵わないと思った。そして強く惹かれた。この人なら僕の全てをわかってくれるかもしれない。僕はすべてをうちあげた。

過去の傷（前書き）

秋彦の過去の話です。

次からラブラブに…なるかな？

過去の傷

「そんなことがあったんだ。俺の母親は父さんのことが好きだったみたいけど、だんだん浮気するようになって、家にも帰らなくなつて俺は父さん一人に育てられた。父さんは俺が20になった時に離婚してそれからずっと再婚なんてまったく考えてなかったみたいだけど…麻衣さんのことは本当に好きみたいだけ。」「嫌ですか？再婚するの。」「うれしいよ！可愛い弟ができるしな」「幸也はうれしいか？」「うん！あつはい…」「別に敬語なんか使わなくても兄弟なんだからさ」「うん！」「秋彦は僕の頭を優しく撫でた。」「そろそろ戻ろうか。」「

「幸也君、お母さんを私にくれるかな？」「はい」「幸也は、俺がもらうね」「秋彦さんっ！」「仲良くなったみたいね。」「うん！」「僕は幸せだと心から思えた。」

同居（前書き）

あまーい感じになりやっとなラブラブに！

同居

それから1週間後僕と秋彦は同居することになった。僕はもともと一人暮らしをしていた秋彦の家に引っ越した。達馬と麻衣は、家族みんなで住みたかったようだが、新婚なので気を使って、秋彦と住むことにした。実際は秋彦と二人だけで住みたかったからだ。

ある日、家にキングサイズのベッドが届けられた。「幸也、今日からは二人で寝ような。俺さ夢なんだ恋人と二人で寝るの。」「恋人なの僕達?」「俺はそのつもりだけど、幸也は違うのかな?」「よくわかんない!僕多分これが初恋だから。」「初恋なの?もう20歳なのに。」「変かな?僕いままで両親にべったりで父親が死んだあとは、それどころじゃなくて...」「たしかに普通は小学校の時にするものだけど、いいんじゃない?俺は幸也の初恋が俺でうれしいよ。」「そうなんだ」「じゃあ、もう寝ようか。」「うん!」

「秋彦さん苦しいよ...」「ごめんね、つかわいかつたから抱きしめちゃった。」「僕も誰かと寝るの久しぶりだからうれしい。小さい頃はパパとママと三人で寝てたけど...」「そうなんだ。」「秋彦は僕を優しく抱きしめた。」「あつたかい すごく安心する。」「幸也、愛してるよ。おやすみ。」「僕も秋彦さん大好き!おやすみ。」

友人（前書き）

会話文ばっかでちょっと読みにくくなってしまうして…まあいい
か！

友人

同居するにあたりいくつかのルールを作った。

1・いままでしていたバイトはやめる

2・朝は秋彦、弁当、夜ご飯は僕が作る

3・ゴミ出しは秋彦、その他の家事は僕

4・特別な理由が無いときは一緒にご飯を食べる

「幸也は本当に飯作るのがうまいよな」「そうかな？ありがとう。」
「あのさ、幸也本当に悪いんだけど…明日1日だけ父さんの所に行つてくれないか？」「何かあるの？」「俺の大学の時の知り合いが家に来るつもりらしくてさ…」「俺部屋にいてるから大丈夫だよ。」
「そういう問題じゃなくピーンポーン誰か来たみたいだね」「僕は玄関へ行きドアを開けた。「はい…」「うわあすっげえ可愛い！」「あのどちら様ですか？」「俺は秋彦の友人の隼人だよ。よろしくねゆきちゃん！」「ゆきちゃ…というか明日来るはずなんじゃ…」「そのつもりだったけど明日だと秋彦のヤツゆきちゃんに会わせなと思うたからさ。」「隼人！お前何しにきた！」「秋彦は僕を隼人から引き剥がした。」「秋彦さん？」「ごめん幸也、こいつに会わせたくなかったから父さんの所に行つて欲しかったんだ。こいつ俺の待ち受け見て幸也のこと口説くとか言い出してさ。」「だって可愛いしゆきちゃん」「確かに幸也は可愛いけど俺の恋人だ。」「秋彦さん何言つて…」「大丈夫だよ、俺は男同士でも兄弟でもまったく気にしないから！それに休憩にケータイでゆきちゃんの写真眺めてるのが悪いあんなかわいい写真見たら口説きたくなるだろ。」「

写真って何？」「えっと…幸也の寝顔の写真…」「そんなこと僕聞いてない！」「ごめん！まさかこいつに見られるとは思わなくて」「秋彦さんにだってわざわざ写真撮ってまで見られたくない！」「なんで？恋人なのに。」「こいつ本気でゆきちゃんに惚れてるから何言っても無駄だよ。」「僕も秋彦のことは好きだが寝顔の写真撮りたいとは思わないな。」「とにかくお前は帰れ！」「なんで？まだゆきちゃんを口説いてないんだけど。」「幸也はお前を好きになんかならねえよ。」「そんなことないよね、ゆきちゃん」「えっと…とにかく僕の一番は秋彦さんです。」「そっかあ ありがとう幸也！ほら、幸也もこう言ってるしさつさと帰れ！」「しょうがない、今日は帰る。またねゆきちゃん！」「はい、さよなら。」「もう来るな」隼人はかえって行った。

俺の初恋

「幸也、なあ怒ってたりする？」

「どうして？」

「俺が勝手に写真撮ってたから。」

「怒ってないよ。ただ恋人ってそういうことするものなのかなと思つて。秋彦さん？」

秋彦は立ち上がり僕を抱き上げベッドに運んだ。

「なあ、幸也は俺のこと好きなんだよな？」 「うん！ 大好

きだよ。……あきひ…んっん」 秋彦は僕の言葉を遮りキスを

してきた。激しいキスに耐えられず秋彦の胸を押し返す。

「……ハアハア 秋彦さん、どうしたの？」

「好きだ！幸也は誰にも渡さない絶対に！だから…幸也…俺だけを見て…俺だけを愛して……」秋彦は泣きそうな目で僕を見つめる。

「秋彦さん、僕を信じて！僕が好きなのは秋彦さんだけだよ。」僕は秋彦を抱きしめた。

「俺はさ、今までそれなりに付き合ったりしたけど来るもの拒まず、去るもの追わずみたいな感じだったから…でも幸也は違うんだ！

俺さ、幸也が文化祭の時にステージで歌ってる所見たんだ。俺の友人の弟が幸也の高校通つててそれで見たんだ。会話したわけじゃないけど思った…似てるな…父さんから再婚相手の子供だった幸也の写真見た時からずっと好きだった。俺だけのものにしかかった。……俺も初恋みたいなもんだ」知らなかった秋彦がレストランで会う前から僕のことを好きでいてくれたこと。

「…秋彦さん…ありがとう…僕の全てを秋彦さんにならあげられる。僕は秋彦さんのものだよ。」

「ありがとう幸也 俺も幸也に全てをあげるよ。愛してる！」

ライブ

『再婚したって聞いた。お前大丈夫か？実は今度ライブハウス借りられることになった。都合がついたら連絡して』

智也『

昨日高校の時のバンドのメンバーから連絡があった。

「秋彦さん、23日の日曜日に友達と遊びたいんだけど……夕飯食
べて来てもらっていいかな？」

「そんなに遅くなるのか？」 「多分…午前中はリハ

ーサルで開演は19時だから終わったら22時頃だとおもう」

「開演って何しにいくんだ？」

「バンドのメンバーで集まってすごく小規模なライブするの。」

「それは俺も行ける？」 「えっ来るの？…あんまり見て欲し

くないんだけど…そんなにうまくないし…」

「でも、みたいな！」

『 智也へ

メールありがとう、俺は大丈夫だ

よ。かつこいいお兄ちゃんもできたし！それでライブ行けるけど
兄の分を席確保できる？

幸也『そして当日……

「なんでお前までいんだよ？ つーかなんで知ってんだよ幸也のラ
イブのこと！」 「いいだろ別に。そんなことよりゆきちゃ
んバンドなんか組んでたんだ。」

「ああ」 「冷たいなあ あっはじまるみたい！」

「なんか全然雰囲気が出ない、いつもと…」

「お前一度しかあったことないだろ！」 「あつゆきちゃん！」 「なんで？ 隼人さんが……秋彦さんがよんだの？」 「俺がこんな呼びかけないだろ！ それより幸也、ライブすごかったな、人いっぱい来てたし。」

「うん！楽しかった。そろそろ帰ろ！」

「ああ」 「隼人さん、さよなら。」

「またね

」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541t/>

僕の初恋

2011年10月9日02時52分発行